

再現された千利休の「朝雲庵」での煎茶体験茶会

方違神社節分祭福豆まき参拝と

“朝雲庵”での煎茶体験茶会

日時: 2008年 2月3日 (節分) 午前
11時～午後3時

講師: 煎茶松風清社幹部 富永清栖 先生

会場: 方違神社・カステラ工房「江久庵」内朝雲庵
堺市堺区北三国ヶ丘町 1-2-36 TEL072-222-2411

三国の境にある方向のない清地 方違神社で節分参拝

朝から小雨が降る節分の昼前。堺の法違神社の境内には、生憎の空模様にも関わらず、多くの参拝者が集っていた。



11時に社殿の出窓から

年男 5 名が青い羽織を着て「福は内、福は内」と大声で叫びなら、箱から取り出した福豆（殻付のピーナッツ豆）をばら蒔くと、童心に戻ったかのように競って人々は受け止め、拾い集める。

5 分ほどの福豆撒きの間に、参加者は多かれ少なかれ福豆を手にすることができた。



どころが、節分の日には参拝者が多いので、事前予約は受けていないとのことで、当日集合時に祈祷の受付をするが、思い

の他時間がかかるとのこと。茶会の予定もあるのでどうしようかと戸惑っていると、社務所の方の計らいで「団体」だからと優遇いただき、一階で沢山お待ちの個人の方もあったのだが、すぐに二階の真新しい神殿にご案内いただきました。外の雑踏の響きが遮断された神殿で厳かにご祈祷を速やかに受けることができた。熟塾や今回の参加者にとって、方違神社はいい方向にあったのかも・・・と感謝すること仕切りだった。

今回、節分の日にお参りした方違神社はとても歴史が長く、10代崇神天皇8年12月29日（紀元前90年）に勅願により創建されたという歴史のある神社。

『万葉集』にも「三国山こずえに住まふむささびの鳥まつがごとわれ待ち瘦せむ」とにも歌われ、摂津住吉郡、

河内丹治比郡、和泉大鳥郡の三つの国の境であったところから、“三国山”“三国の衢（ちまた）”また“三国丘”とも称され、何処の国にも属さず方向のない境・清地であるとされたところから、境内の土と菰の葉にて作られた粽は、悪い方位を祓うという信仰が広まった。この三国の境であることが現在の“堺”の地名の由緒であるとも謂われている。

奈良時代には僧行基がこの辻に伏屋を設けて旅人を休憩場としたり、平安時代には天皇から一般大衆までが多くの人々がお参りしたという熊野詣の道中であったところから、必ず方違神社へも参詣し道中の安全を祈った。今でも方災除の神として全国的に知られ、新築、改造、転宅、旅行等について御神札、御砂及び粽を授け、方除祈祷のお祓いを望む人が多い。



私たちは奇しくも、節分にこの神社を訪ねたが、神功皇后が堺の浦へ上陸さ

れ三国ヶ丘で方違の祓をされた時、皇后が日頃お守り本尊のようにされていた黄金の小雞を丘に埋められ「汝はここで永久に民人に暁を告げよ」とおっしゃった。それから毎朝東の空が朝焼けで染まる頃には、金鈴を振るような雞の聲が暁を破って朗らかに響きわたるようになり、民人たちはその聲で毎朝目をさましたという伝説がある。方違神社の南方にある鈴山がその丘であるといわれ、この金雞の聲を聞くと幸福が来るというので、かつては節分の夜にその鈴山の麓で夜を明かす人々が多かったそうだ。社務所ではその故事により、幸雞の鈴（さちがけのすず）が販売されている。

また境内には神功皇后が御馬をつながれたと伝えられる旧蹟「神功皇后御馬繫之松」もある。

当日、火焚木〔神道護摩（しんどうごま）〕と呼ばれる串に、厄年の厄除けや災難、悩み等を書き記し、その串を忌火で焚き、その火の霊力によりすべての邪気を祓うという火焚木（ほたぎ）神事があり、煙が立ち込めるとんとの前で記念写真をパチリ。



因みに方違神社によると「**方向とは**「方角がいい」「方角が悪い」という言葉を生活の中でよく使います。

方位（方角）というのは、人間の生活ととても密着していることです。たとえば、日本人は、農耕民族ですので、太古の昔から春に種をまき秋に収穫をするということを当たり前のこととしてやってきました。時計はおろか暦も無い時代は、どうやって種をまく時期を知ったのでしょうか？恐らく日本人に限らず古代人は、太陽や星を見て「あの山の真上から太陽が登ると種まきの時期だ」とか「この星が、一番下に来たときが、収穫の時期だ」といった具合に季節を知ったことでしょう。そうして暦を作り、生活の基本をその暦に従って行ったと考えられます。また、家を建てる時に北側に入り口を作ると建物の中は、光が届かなく（古代にはガラスの窓はありませんから、入り口からの光が主になります）暗くなります。寒い冬場には北風が容赦なく吹き込むことになります。当然環境が悪くなりますから食べ物も腐りやすく、病気などにもなりやすかったことでしょう。

そうしたことを経験から方位という考え方が生まれてきました。古代から中世、近世に至るまで、政ごとから一般民衆の信仰へと深く染み渡り、私たちの生活の中に密着してきたのです。

方違とは、陰陽道（おんみょうどう）の説により平安時代以降に行われ、院政期に最も盛んに行われた風習で、外出の目的地が禁忌の方向に当たる場合、前夜に別の方角に行き泊まり、方角を変えてから出発した行為を指します。また、作事などが禁忌の方角に当たる場合、いったん他に宿泊してその忌を他所に移したりもしました。鬼門とは、陰陽道で鬼が出入りするとされる不吉な方角。表鬼門は北東・裏鬼門は南西、方違神社では鬼門を不吉とはみなさず特に清浄を保つべき方位とされています。」

池崎宗男さんが手掛けたお庭がご縁で朝雲庵で茶会

今回の企画は、塾生で造園業を営む池田宗男さんの提案だった。方違神社の隣のカステラ工房の「江久庵」内に再現された安土桃山時代に大坂屋敷内に450年前に実在した千利休の茶室。この再建には、京都工芸繊維大学の中村昌夫名誉教授監修の元、2億5千万円で再現されたという朝雲庵があり、造園業を営む池崎宗男さんはその庭の再現に携わった。一度塾塾でもこの庵を利用した企画をと、奥様と一緒に下見にいったのが昨年秋だった。2億5千万の茶室を利用させていただくのは貴重な体験になるが・・・茶会となると参加者の敷居が高いのではと、考えているところへ、一昨年、宇治茶の里を訪ねた黄檗山満福寺の門を潜った時、偶然にもその日が「煎茶大会」があり全国から煎茶の各流派が集い抹茶とは異なるお道具や作法などが目新しかったのが印象深かったの

を思い出した。そんな時「堺なんや衆」の岡田さんから、堺で活躍されている煎茶の先生がいらっしやるとお聞きした。二億五千万の朝雲庵をお借りできるのなら、抹茶席よりも煎茶での茶会を体験する機会は少ないのではと話がまとまり、会場の隣には方違神社があるので節分の豆まきに参加し正式参拝後、体験茶会をとということになった。当日は午前中から道具を用意したりで、富永先生のお弟子さん4名も駆けつけてくださる煎茶体験茶会となった。

当日は、池崎さんのお知り合いの方も参加いただき31名近くなったので、二組に分かれて茶会を体験。方違神社参拝後、先に塾塾のメンバーが中心となった一組が先に茶席に入り、後の一組は先に江久庵の名物釜飯のうち季節の「蟹釜飯」の昼食を取った後に茶席に入るようになった。



講師：富永清栖先生 堺市生まれ。煎茶松風清社幹部 堺女性大学講師。幼少の頃より松風清社幹部、祖父（初代富永潤泉）、母（二代目 富永潤泉）に煎茶道を師事。昭和45年 皆伝取得。平成6年、煎茶松風清社幹部就任。平成12年 総皆伝取得。

参加者は少し緊張した面持ちで茶席に並ぶ。正客の席には塾塾の下野さんが陣取る。全員、初めての煎茶茶会体験者ばかり。富永先生からの説明をうけながらの茶会になった。また今回のお茶席では、飲み干した各自の湯飲みの底に異なる番号が描かれ、飲み干した後に、運勢占いのような趣向もあった。



煎茶の手順

茗主 挨拶：

一煎差し上げます。どうぞお楽に

客 総礼

（客は、茗主が急須に茶を入れるのを見て呈された菓子を取り回す。菓子鉢のあいたものは末席へ出しておく。）



茗主： 不加減でございます

正客 両手で茶托をもって、へり内へ入れます。

（連客はそれにならいます。）



右手で茶碗をとって左手にのせ、かるく頭を下げたあと、一口いただきます。右手をひざ上において、茶加減に対してあいさつをします。つづいて「茶銘」、「詰」をたずねます。あと、残った茶をいただきます。茶碗や茶

托の拝見がすむと茶碗をふせます。お菓子をいただきます。

童子：茶碗を集める

茗主：つづいて不加減でございませ

客：菓子の名、製を尋ねる。



茶会終了後に、蟹釜飯の昼食を取り、江久庵のビルの屋上からの展望を楽しんだ後、庭を手がけた池崎さんの紹介で朝雲庵のお庭を見学。

もう一組も昼食の後にお茶席に入り、戻ったところで、二階の講堂に全員集合。富永先生や社中の皆さんにお礼を申し上げて、一緒に茶会の記念に写真に収まった。で希望者は菓子代のみで、もう一服煎茶をゆっくりと味わうこともできた。



会場提供：カステラ工房 江久庵

協力：煎茶松風清社 富永清栖先生及び社中の皆様
堺なんや衆 岡田明寛氏

参加者：一般：池崎・石井聖美・和泉雅一・岡村・熊谷京子母・佐伯恵美子・坂本・谷口・長尾・難波りんご・野口
塾生：池崎宗男・大森史子・柄谷宗子・北村千代江・木村正治・熊谷京子・杉山英三・下野譲・田中稔三・谷福江・中村京子・中村孝夫・原田彰子・浜田真弓・東口恵子・堀結美子・森欣子（敬称略・アイエウ順）

煎茶の歴史

中国のお茶は遠く二千年以上昔から飲まれていましたが長い間薬として扱われていました。唐代に陸羽が「茶経」にお茶の効能や喫茶の法を詳しく書きあらわしました。

「陸羽」(陸鴻漸) 陸羽の人となりは、ある朝一人の老僧が中国湖北省天門県の西湖の水辺を歩いていたところたくさんの雁が湖面に群がってやかましく鳴いているので近づくとその雁の翼の下に生まれたばかりの嬰兒が覆い隠されていたということです。この老僧は智積と呼ばれ、雁の翼の下の赤子が後の陸羽だったそうです。陸羽は智積に養われて弟子となりましたが、その後流浪の生活をつづけ一心不乱に勉強して学者としての著述に専念し「茶経」三巻を著わしました。

「茶経」人々がお茶を喫し味わう要諦を説いているばかりではなく、その中は万有の哲理を含んだことも言い尽くしています。茶道の発達に大いに力を与えました。この書にふれた後代の文人たちによって清雅な書齋における嗜好品として愛用されるようになりました。

明代の文人達は香り高い煎茶を喫しつつ、詩をうたい、絵画を語り美術工芸を愛でるといふ文人趣味を生み出しました。この文人趣味が新しい禅宗として江戸時代、わが国に渡来した黄檗宗とともに伝えられ発展したのが日本の煎茶の世界です。

「盧同」 中国、唐の済源の人。号は玉川子。陸羽の友人。有名な「茶歌」の名作があつて茶人の間にあまねく授謠されています。

茶歌：一碗 喉吻を潤し。二碗 孤悶を破る。三碗 枯腸を授る。四碗 軽汗を発す。五碗 肌骨清し。六碗 仏霊通ず。七碗 喫し得ざるなり。唯覚ゆ 両碗習々として清風を生ずる。

栄西禅師 (1141年) に生まれる。日本の臨済宗の開祖。最初に宋より帰国した際、茶の種を背振山にまいたといわれています。「喫茶養生記」を表しました。茶は養生の仙薬なり、延齡の妙術なり、山谷にこれを生ずれば其の地神靈なり。人倫これを採らば其の人長命なり

隠元禅師 1654年渡来し朝廷や徳川幕府の加護を受け、京都宇治に黄檗山萬福寺を開きました。

高遊外壳茶翁 (1675～1763年) 肥前蓮池藩の御典医の家に生まれました。幼い時父と死別し十二才で僧侶となり萬福寺など各地で修行しました。六十一才の時鴨川の近くに「通仙亭」という茶店を設け、身分の貴賤を問わず往来の人々にお茶を売り始めました。又、季節の折々には煎茶の道具を担ぎ、東福寺の通天橋、糺の森など人の集まる場所にも出かけました。

「茶銭は黄金百鎰より半文銭まではくれ次第 ただ飲みも勝手 ただよりは負け申さず」というのが口上だったそうです。